2026年３月８日（大斎節第３主日、Ａ年）
メッセージ

「変えられた負の烙印」

（ヨハネによる福音書４：５-42）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音はイエスとサマリアの女性との出会いのお話でした。人が誰かと出会うには、時間が必要です。それゆえ、今日の箇所は必然的に長いのだと思います。今日の場面は、言ってみれば井戸端会議です。当時、ユダヤ人たちはサマリア人のことを異邦人の習慣や宗教の影響を受けた堕落した人たちだと蔑んでいました。しかし、神はそのサマリアの女性とイエスを井戸端で出会わせました。イエスは彼女に水を求めました。しかし、彼女にとってはまだ、目の前の男は自分たちを差別するユダヤ人の男の一人に過ぎません。皮肉たっぷりに「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか。」と応えます。しかし実は、この女性の皮肉たっぷりなひと言が大切なのです。水をください、はいどうぞ、では、それで終わりです。しかし、彼女はそこでイエスに物申したわけです。長い井戸端会議がこれにより始まることになる。つまり、イエスとの出会いがこれにより始まるのです。そして彼女は、このあともイエスの言葉一つ一つに反応します。こだわるのです。なぜでしょうか。それは、彼女が渇いていたからに他なりません。

彼女は二つの負の烙印を押されていた存在でした。ひとつ目の烙印は、ユダヤ人から蔑視されていたサマリアの女性であったこと。そして、もう一つ。彼女にはかつて五人の夫がいて、今一緒にいる男は夫ではない。村の人々から胡散臭い目で見られていたのでしょう。つまり、彼女はユダヤ人からも、サマリア人からも負の烙印を押されていた存在であったのです。しかし、その負の烙印こそが、イエスとの出会いのきっかけになりました。「なぜ、ユダヤ人のあなたがわたしに水を求めるのか」という彼女の始めの問は、サマリア人としてつけられた烙印ゆえの問です。これにより、彼女とイエスとの会話は始まります。そしてもう一つの烙印、五人の夫と、現在の男のことをイエスが言い当てたことで、彼女のイエスへの見方が大きく変化しました。こうして、人によって押された負の烙印こそが、イエスとの出会いへ導くものとなりました。彼女は、ずっと渇いていたのです。しかし、その渇き故に、それらの烙印はイエスによって変えられ、渇きは癒やされました。まさに、命の水、永遠に枯れることのない水が注がれたのです。

イエスとの出会いは、この女性のように、イエスとの関係に留まることで起こります。その関係の始まりは、「水を飲ませてください」というイエスからの語りかけでした。負の烙印を押され、渇いていた女性にとって、「水を飲ませてください」という言葉は「あなたに助けてもらいたい」、「あなたが必要なのだ」という言葉にほかなりませんでした。そして、サマリアの女性はイエスとの交わりに留まる中で、イエスに真の意味で出会い、渇きは癒され、喜びのうちに、自分に負の烙印を押した人々の元へとイエスを知らせに走りました。こうして、負の烙印は神の栄光を表すしるしへと変えられたのです。